

家庭科教員養成における実践力向上のための取り組み

The Approach to Improve Practical Skills in Home Economics Teacher Training

河田 いづる*

Izuru KAWATA

要 旨

本学家庭科教育の領域には、「中学高校の家庭科の先生にあこがれて」、「中学高校の部活動でスポーツ栄養の大切さを知ったから」といった理由から家庭科教員を目指す学生が多い。1年生にアンケートを取ると、「教師になれるといいな43%・教師になりたい43%・絶対になりたい14%、免許だけ取りたい0%」である。この傾向は例年あまり変わらないが、様々な体験を経るうちに「なれるといいな」から「なりたい」、そして「絶対になりたい」と意識の変容が見られることがわかった。この研究は、コロナ禍で大学生活や高校生活を送った学生たちの成長の機会を創造し系統化することで学生の教職に対する志を維持・向上させていく取り組みである。体験を通して成長したと感じられた学生は、「教師に絶対になる」という明確な目標を持ち教師への道（採用試験合格、教師力養成のための研修に積極的に参加、後輩のサポート）に進進するようになる。教員養成における実践力向上について、GIGAスクール構想への対応、模擬授業研究、高大連携、教師力養成のための様々な活動の取組、成果、課題について考察した。

●キーワード：家庭科教育、授業実践力、模擬授業、ICT

1. はじめに

令和3年（2021年）、「令和の日本型学校教育」を担う教師および教職員集団の姿が次のように示された。「①変化を前向きに受け止め、教職生涯を通じて学び続ける、②子供一人一人の学びを最大限に引き出す役割を果たす、③子供の主体的な学びを支援する伴走者としての能力を備えている、④多様な外部人材や専門スタッフ等とのチームとして力を発揮する、⑤教師が創造的で魅力ある仕事であることが再認識され、教師自身も士気を高め、誇りを持って働くことができる。」¹⁾教師は生徒一人一人の成長に関わり、自分自身も成長できるやりがいのある仕事である。しかしながら、普通免許授与件数は中高で年々減少し、新卒受験者が減少している。高校家庭に関して退職に伴う採用者数微増、産休・育休取得者の代替教員や多様な学びに対応するためTTの導入などに対応する臨時的任用教員が不足する「教師不足」が発生している。

こうした実態を受け、令和4年12月に出された中央教育審議会答申では、「質の高い教職員集団を実現する『令和の日本型学校教育』を実現するための、教職員の養成・採用・研修の在り方が示された。養成段階においては、理論と実践を往還させた省察力による学びを実現するため、今日的な教育課題に対応した多様な現場体験・学習機会等充実を図ること」が求められている。

2. 現代食文化学科「家庭科教育」の授業概要

本学食文化学部現代食文化学科では、栄養士資格取得の他、中学校教諭一種免許状（家庭）、高等学校教諭一種免許状（家庭）が取得できる教育課程が編成されている（図1）。



図1 現代食文化学科5つの領域 (大学HPより)

* くらしき作陽大学食文化学部 Faculty of Food Culture Kurashiki Sakuyo University

教職を希望する学生が4年間で履修する科目モデル（例）は図2の通りである。

1年生					2年生				
全学共通必修	全学共通選択	学科開講必修	学科開講選択	教職科目	全学共通必修	全学共通選択	学科開講必修	学科開講選択	教職科目
創立者松田藤子の志 創立者松田藤子の教え キャンパスライフデザインⅠ,Ⅱ Ⅱリテラシー基礎 Basic English A.B 外国語会話科目 くらしき学講座	日本国憲法 心理学 ひとの心を動かすひ どになる講座)	食活人キャリアⅠ,Ⅱ 食文化論 基礎実験 地産地消実習 社会福祉概論 解剖生理学Ⅰ 生化学 食品学Ⅰ,Ⅱ 食品学実験 調理学 調理学実習Ⅰ,Ⅱ 栄養学総論 家庭科教育法Ⅰ	被服学概論 情報処理	教職概論	健康スポーツ ひとの心を動かすひ どになる講座)	食活人キャリアⅢ,Ⅳ 日本食一次予防論 公衆衛生学 食品衛生学 食品衛生学実験 解剖生理学Ⅱ 病理学 解剖生理学実習 栄養生理・生化学実験 栄養学各論 栄養学実習Ⅰ,Ⅱ 臨床栄養学概論 栄養指導論Ⅰ,Ⅱ 公衆栄養学Ⅰ,Ⅱ 給食管理 家庭科教育法Ⅱ 家庭科教育法Ⅲ	住居学 家族関係学 家庭経営学 被服製作実習Ⅰ,Ⅱ 教師力養成セミナーA 日本の料理	教育原理 教育心理学 教育課程総論 特別活動の指導法 教育方法・技術論 <small>(情報通信技術の活用を含む)</small>	
12	4	25	4	-	1	0	35	9	-
45					45				
3年生					4年生				
全学共通必修	全学共通選択	学科開講必修	学科開講選択	教職科目	全学共通必修	全学共通選択	学科開講必修	学科開講選択	教職科目
健康科学 大乗仏教から学ぶ人間形成Ⅰ,Ⅱ	ひとの心を動かすひ どになる講座) ワークライフデザイン	臨床栄養学各論 臨床栄養学実習 栄養指導実習Ⅰ,Ⅱ 給食管理実習 給食計画論実習 給食管理校外実習 校外実習総合演習 総合演習 家庭科教育法Ⅳ	食活人キャリアⅤ,Ⅵ 保育学 教師力養成セミナーA・B 世界の料理	教育の制度と経営 特別支援教育総論 道徳教育指導論 総合的な学習の時間の指導法 生徒・進路指導論 教育相談の理論と方法 教育実習指導 教育実習		ひとの心を動かすひ どになる講座)	卒業研究	教師力養成セミナーB 教育活動実践演習 ヘルスマネジメント実習B スポーツフード実習 健康増進実践演習	教職実践演習
3	2	12	7	-	0	0	4	6	-
24					10				

図2 2024年度生家庭科教育履修モデル
(卒業必修科目以外に必要な教職科目)

卒業必修科目以外に必要な教職科目
26

3. GIGAスクール構想^{注1)}に対応したICT活用への対応

令和2年10月、「『令和の日本型学校教育』の構築を目指して～全ての子供たちの可能性を引き出す

注1) これまでの教育実践の蓄積にICTをかけ合わせ、学習活動の一層の充実と主体的・対話的で深い学びの視点から授業改善を図ることを目標としている(2020)。

https://www.mext.go.jp/kaigisiryoo/content/20200706-mxt_syoto01-000008468-22.pdf

個別最適な学びと協働的な学びの実現～（中間まとめ）」が初等中等教育分科会から出された。このことを受け、令和3年1月、中央教育審議会「『令和の日本型学校教育』を担う教師の学びの姿の実現に向けて」審議まとめが示された。その中で、「令和の日本型教育」の在り方を「すべての子供たちの可能性を引き出す個別最適な学びと、協働的な学びの実現」と定義している。教職課程コアカリキュラムでは、教育職員免許法及び同施行規則に基づき、「各教科の指導法（情報機器及び教材の活用を含む。）」では、全体像を理解し、学習指導要領に示された当該教科の学習内容について背景となる学問領域と関連させて理解を深めるとともに、様々な学習指導理論を踏まえて具体的な授業場면을想定した授業設計を行う方法を身に付けることが示されたのである。

（1）1人1台端末導入と新学習指導要領について

岡山県では、令和2年10月、県立高校に生徒1人1台端末を活用した最先端のICT教育を取り入れるため、教育用クラウド環境や高速大容量の通信環境等のICT環境整備に向け、令和3～4年度の入学生から学校指定端末を購入させ、活用している²⁾。その導入端末は表1の通りである。

表1 岡山県立高等学校等の1人1台端末の導入状況
岡山県教育委員会高校教育課「県立高等学校等の生徒1人1台端末の導入について」より作成

OS	令和2年以前導入	令和3年導入	令和4年導入	合計
Chrome	3	29	11	43
iPad	0	6	4	10
Windows	0	1	1	2
合計	3	36	16	55

表1からわかるように、令和3年度には約7割の高校でタブレット端末が導入され、1年生から各教科の授業で活用することとなった。このことを受け、令和3年度教育実習生（4年生）からは「新学習指導要領」に基づいた授業と1人1台端末を見据えた教材研究と授業の実践が求められた（表2）。

表2 高校での教育実習

	1人1台端末	教科書
令和4年度	1年あるいは1・2年	新学習指導要領1年、現学習指導要領2・3年
令和5年度	1・2年あるいは全学年	新学習指導要領1・2年、現学習指導要領3年
令和6年度	全学年	新学習指導要領1・2・3年

例えば、「家庭総合」（4単位）を1年・2年で分割履修している場合、現2年生は現学習指導要領で、現1年生は新学習指導要領に対応した教科書と内容を指導することとなっている。令和4年度実習生から令和6年度実習生は自分たちが受けたことのない教科書や1人1台端末を活用しての教材を考え授業を組み立てることとなった。次の表は各年度実習生の置かれた状況と実習目標である（表3）。

表3 各年度実習生の置かれた状況と教育実習目標

	状況	実習目標
令和4年度	<ul style="list-style-type: none"> ・コロナ禍での大学生生活 ・「新学習指導要領」に対応した新しい教科書 ・高校現場でのタブレット導入 	<ul style="list-style-type: none"> ・Chromebookを活用する。・ICTの活用状況を見学する。 ・多くの先生の授業を見学する。・生徒の実態を把握する。 ・笑顔で挨拶をする。名前を覚える。
令和5年度	<ul style="list-style-type: none"> ・コロナ禍での大学生生活 ・タブレットの活用方法を模索 ・教員採用試験の前倒し 	<ul style="list-style-type: none"> ・Chromebookを効果的に活用する。 ・多くの先生の授業を見学する。・生徒理解に努める。 ・教師の仕事を観察する。
令和6年度	<ul style="list-style-type: none"> ・3年での介護等体験や様々な行事が復活 ・タブレットの効果的活用を模索 ・教員採用試験のさらなる前倒し 	<ul style="list-style-type: none"> ・生徒理解に努め、Chromebookを効果的に活用する。 ・多くの授業を参観し、授業力向上に努める。 ・アクティブラーニングを取り入れた授業展開を行う。

現代食文化学科家庭科教育の教職志望者は、総じて意欲的な学生が多く、学内の理論や実践を学外につなげる機会、学外で研修する機会等、学生のための多様な体験の機会を創造する環境に恵まれている。加えて、情熱を持ち教育実習生の指導に当たってくださる実習校の先生方にも感謝申し上げたい。

4. 実践活動（令和4年度～6年度）

（1）授業実践

令和3年までの高校の授業は、教師がスライドや動画を用いて説明したり、生徒の学習成果の発表時に活用したりするにとどまっていることが多かった。しかし、令和4年から高等学校では生徒1人1人がタブレット端末を購入し、どの科目でも積極的に活用することが義務づけられている。教師自らがICT機器を効果的に活用できるよう知識や技術を身につけておかなければならない。教員養成課程においても教育実習で「ICT機器を適切に且つ効果的に活用する授業」実践が求められている。3週間という短い期間に生徒を理解し、授業での効果的な活用は容易ではないが、事前に模擬授業や高校生の授業に触れる機会を作ることで、教育実習に向けての姿勢や意気込みが変わってくる。取り組み事例は次の通りである。

① 授業での模擬授業

図2及び表4のとおり、1学年から模擬授業実践を重ね、他の人の模擬授業を見ることで、小中高の「家庭科」の学びの系統性を理解し、実生活と関連を図った問題解決的な学習を授業の中に組み込んでいくことができる。模擬授業のテーマは各授業段階により異なるが、質疑応答の他必ず、①授業者からの感想、反省、②授業を受けた側から良かった点・注意したらよい点・まねしたい点について発言する、③学習指導案、ワークシートは人数分印刷し配布することにより、各自の授業づくりの参考にすることをルールとした。学生の感想は次の通りである。

- ・50分の授業を組み立てるのは難しいが、回数を重ねているうちにできるようになった。
- ・先輩に授業を見てもらう時は緊張するが、アドバイスが的確で勉強になる。
- ・授業を作るのは楽しいが、学習指導案の作成は苦手。
- ・PowerPointは自由度が高く作りなれているが、Chromebookに対応したGoogleスライドは使いにくい。
- ・模擬授業を見合うのは自分の授業作りの参考になる。
- ・Googleスライドの方が、画面がシンプルで見やすい。1つのスライドに情報を入れすぎない。
- ・先輩の授業は迫力があり、自分もそのような授業ができるようになるのか頑張りたい。
- ・板書を上手に使うと、授業の目標とまとめが授業の終わりに確認できる。
- ・板書だけの授業に立ち返ったうえで、ICTを効果的に活用していきたい。
- ・他の人の学習指導案やワークシートは、その領域の授業を考えるとときに参考になる。

表4 授業実践力をつける模擬授業研究

授業	模擬授業内容
家庭科教育法Ⅰ	模擬授業①：ICTを活用した「主体的・対話的で深い学び」を推進するための教材作成
家庭科教育法Ⅱ	模擬授業②：アクティブラーニングを効果的に取り入れた授業研究 模擬授業③：実践的・体験的学習を取り入れた学習指導案、小テストの作成
家庭科教育法Ⅲ	模擬授業④：学習指導案、Chromebookを活用（調査・情報共有・思考・提出）した授業づくり
家庭科教育法Ⅳ	模擬授業⑤：「指導と評価の一体化」、まとめを注視した学習指導案、考查問題の作成 模擬授業⑥：作陽学園高校での授業づくり「生徒理解のための対話型授業」 模擬授業⑦：教育実習を想定しての授業づくりⅠ
教育実習指導	模擬授業⑧：教育実習を想定しての授業づくりⅡ *模擬授業研究会 模擬授業⑨：教育実習後の授業、反省 *模擬授業研究会
教職実践演習	模擬授業⑩：作陽学園高校での授業づくり「TTによる調理実習の工夫」

② 模擬授業研究会

家庭科教育領域では、学年を超えて「学び合う」ことを目的として模擬授業研究を行っている。学生は、学習指導案、ワークシートや小テストを準備し、50分の授業を行う。アクティブラーニングを取り入れ、目標・指導・評価の一体化を大切にし、授業者のまとめと生徒側の振り返りを大切にさせている。授業後は、授業者の振り返りと生徒側の学生は感想を発表する。気になった点、良かった点、まねしたい点を具体的に言葉にすることで、参加者全員が次の授業に活かすことができている。自分の想定した導入だけでなく他者の導入や授業の仕掛けに触れることで視野を広げ授業づくりの楽しさ

を学び、教員採用試験の模擬授業対策につなげている。令和6年度は、「家庭科教育法Ⅲ・Ⅳ」の授業が学校現場の黒板に近い大きさの教室で開講できているため、学生の模擬授業にも迫力が加わってきている。配慮に感謝している。令和6年度の模擬授業研究会は表5の通りである（予定を含む）。

表5 令和6年度模擬授業研究会

前期	家庭科教育法Ⅰ・家庭科教育法Ⅲ・教育実習指導
後期	家庭科教育法Ⅰ・家庭科教育法Ⅱ・家庭科教育法Ⅳ・教育実習指導・教職実践演習
対策講座	春季・夏季・冬季①・冬季② *1~4年対象

【使用機器】個人PC、Chromebook、iPad、wi-fiルーター、プロジェクター、ポインター
 ・Googleエデュケーションの教師側、生徒側環境が理解でき効果的に活用できる。
 (Classroom、スライド、Forms、スプレッドシート、meet、チャット)

③ 作陽学園高校での教育活動

令和5年度に津山市から倉敷市玉島に移転してきた作陽学園高校において、実習室整備（図3）、模擬授業、実習補助、部活動補助等の機会を得ている。家庭科教員は専門学科、総合学科では複数配置されているが、一人配置や兼務配置も少なくない。新しい実習室の整備に当たることは学生にとって貴重な経験となった。調理実習では、TT^{注ii)}の経験、食材の見積もりや購入、時間配分、調理実習の使用の徹底など全てが初めての経験で改めて家庭科教員として必要な力や教壇に立つまでにつけておきたい力を振り返ることができた。

表6 作陽学園高校での実践 *令和6年度は予定

令和5年度	実習室整備(3・4年)	機器、用具の整理、調理実習試作
	模擬授業(3・4年)	模擬授業（食品ロス、消費生活） 調理実習 TT（朝食欠食を防ぐ献立、食中毒を防ぐ三原則を押さえた調理実習、お弁当）
	実習補助(3年)	調理実習補助（朝食欠食を防ぐ献立）
	部活動補助(4年)	フードプランニング（ウインナーのパイ生地包み他）
令和6年度*	模擬授業(3・4年)、実習補助(3年)、部活動補助(4年)、部活動補助(3年)、部活動指導(3・4年)	



図3 調理台下の写真カードと片づけチェックシート

【片づけチェックシート】 *食器拭きと台拭きを使い分けましょう。		
チェック	場所	片づけ
<input type="checkbox"/>	椅子	拭き台の下へ片づける
<input type="checkbox"/>	調理台・調理台の横	台拭きで拭く
<input type="checkbox"/>	調理台の中	器具等を整理する
<input type="checkbox"/>	拭き台	台拭きで拭く
<input type="checkbox"/>	料理台の隅	台拭きで拭く
<input type="checkbox"/>	生ごみ	排水溝ネットにまとめ、水気を絞ってゴミ箱へ
<input type="checkbox"/>	三角コーナー	生ごみを捨てきれいに洗い拭いておく
<input type="checkbox"/>	排水溝	生ごみがないかチェックする
<input type="checkbox"/>	流し台	台拭きで水気を拭き取る
<input type="checkbox"/>	スポンジ	水気をしっかり絞る
<input type="checkbox"/>	床	ほうき・モップをかける（水気を雑巾でふき取る）
<input type="checkbox"/>	オープン	台拭きで拭く
<input type="checkbox"/>	食器	水気をしっかりふき取り、元の場所へ戻す
<input type="checkbox"/>	洗剤・アルコール	補充する
<input type="checkbox"/> ごみはその都度、捨てましょう。		

④ 探求型学習

授業では「何がわかったか」「何が身についたか」「何ができるようになったか」を確認することが重要である。家庭科の持続可能な生活の指導では、今日この時から生徒の意識や行動様式が変わることを目標としている。そのため、授業の導入で生徒をどう引きつけられるかが重要である。「家庭科教育法Ⅰ」では、先輩たちの学習指導案や模擬授業を参考に荒削りながら学習指導案を作成し、少人数を対象に6分間の導入の模擬授業を行っている。授業後の反省としては、「前に立って授業をすると思うと緊張したが、終わってみると達成感があり、授業作りの楽しさが味わえた。」「次は他の人

注 ii) Team Teaching 複数の教師が協力して授業を行うこと。

の導入を参考にもっと良い授業をしたい。」といった肯定的な意見が多く出た。導入で生徒を引きつけるのに有効であったメディア教材をあげる（表7）。

表7 導入に有効と思えるメディア教材一覧（例）

メディア	単元	タイトル
NHK 高校講座（各20分）	家庭総合各単元	
AC ジャパン（15秒～1分）	食品ロス	おむすびころりん
	SDGs	命がけの行列
	ヤングケアラー	ヤングケアラー
	ジェンダー	聞こえてきた声
	高齢者	寛容ラップ
認定特定非営利活動法人 Learning for All（2分11秒）	子供の貧困	子ども食堂は、あなた食堂
	子供の貧困	子どもって、

⑤ 教育実習報告会

教育実習後に4年生が教職志望の1～3年生、食文化学部の先生対象に報告会を開催している。受付、進行、記録計時等の運営は3年生が行い、依頼状とお礼状の作成は4年生が行っている。この経験も学校現場で実際に役立ってくる。次年度につなげていくため、後輩へのアンケートはGoogle Formsで行っている（図3）。ICTを文房具のように活用し、教職志望者たちの絆が卒業後もつながっていく機会と考えている。

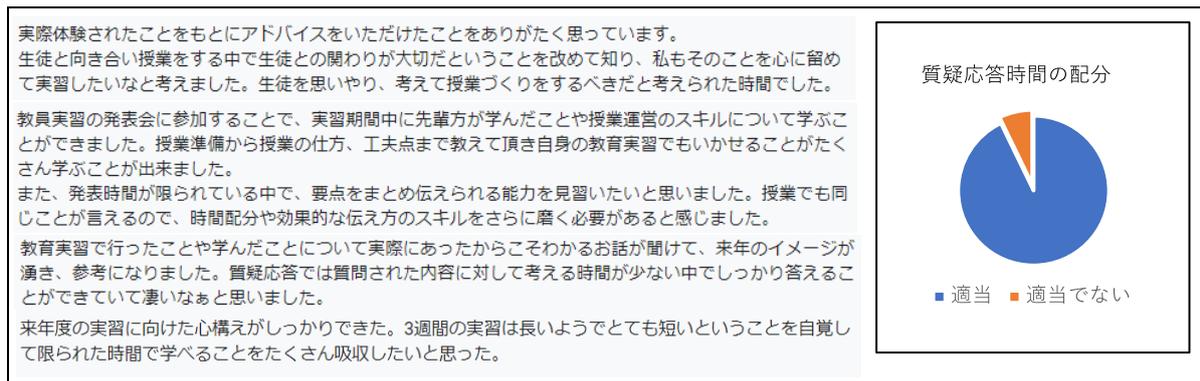


図3 教育実習報告会アンケート結果より一部抜粋（Googleフォーム）

（2）教師力養成のための活動

① オープンキャンパスでのミニ講座

オープンキャンパスでの学生スタッフの経験は、教職を目指す学生にとって貴重な機会となるため、オープンキャンパスで育成する力を次のように捉え指導している。

- ・コミュニケーションスキルの向上
- ・自己成長を認識する機会
- ・母校愛と学園への貢献意識
- ・イベント企画力と時間管理意識
- ・リーダーシップとチームで協働する力

令和6年3月オープンキャンパスからは、プロジェクターを用いて、学生が家庭科教職課程の4年間の学修の説明とミニ授業を行っている。自分の学んでいることを高校生や保護者に説明することで、「教師になる」という目標を明確にしている。令和6年度は教員採用試験日程の早期化と3年生チャレンジ受験が開始され、1・2年生中心での実施となったが、教員採用試験に現役合格をした学生が急遽、シンポジウムや教職ブースのミニ授業を進行してくれたことは後輩たちの士気を高める機会となり大きな成果につながった。体験が経験に積み重なり、学生の自己肯定感が高まることを共有できたオープンキャンパスであった。このことを受け、6月のオープンキャンパスからは入学したばかりの1年生にオープンキャンパスのブースを託すこととした。もちろん2年生のサポート力が必要ではあるが、当日は大学入学直後の楽しそうな姿を高校生や保護者に見てもらうことができた。6月、8

月のオープンキャンパスには、3月卒業の先輩たちが教職ブースを訪ねてくれ、教職を目指す後輩や高校生がロールモデルに触れることができた。学生たちからは、学年を超えて協働しブース運営ができたことで達成感が得られたとの声を聴くことができた。

② ティーチン倉敷中央の学生ファシリテーター

令和4年度までは一般大学生として参加していたが、令和5年度からは学生ファシリテーターとして高校担当者とも事前打合会を持ちながら実施している。夏冬の年2回開催し、1回目はテーマに沿い、大学生が高校生にインプット、2回目は1回目のティーチンで学習したことを発展させた(表8)。

表8 ティーチン倉敷中央の概要 *令和6年度冬は予定

	テーマ	内容	参加者
令和5年夏	どうする?どうなる? 「子育て支援」	・人生スケジュールを立てよう (Google Forms) ・子育て支援プッチ情報 ・子育て支援座談会 (Jamboard)	高校生10人 本学学生10人(1・2年)
令和5年冬	子育て支援 ～子育てプロに聴く～	・「夏」の振り返りPP ・子育てプロにインタビュー (真っ最中プロ、子育て卒業プロ、子育て支援政策プロ、保育園のプロ、イクメンのプロ)、グループワークと発表	高校生18人、中学生10人、本学学生11人(2・3・4年)、PTA14人
令和6年夏	子ども食堂	・子ども食堂アンケート (Google Forms) ・子ども食堂に関わった経験を大学生・高校生が話す ・こんな子ども食堂作りたい! グループワークと発表	高校生33人 本学学生7人(1・2・4年)
令和6年冬*	子ども食堂	・子ども食堂レシピ提案 (予定)	高校生、大学生、地域

【成果と課題】 学生の感想から

- 成果： ・テーマが授業で学習している内容であったため、スライドや動画で紹介しやすかった。
 ・担当を決め、LINEで連絡を取りながらGoogleスライドを作成した。作成した内容を高校側担当者と共有することで直前まで修正をすることができた。
 ・JamboardやGoogle Formsを活用することにより、意見の共有や最初と最後の意識の変化を読み取り、全員で共有することができた。
 ・校長先生や担当の先生に「とてもよい取り組み」と評価していただき、やりがいを感じた。
 ・複数回参加するうちに自信を持って会を運営できるようになった。

課題： ・高校生や中学生が参加しやすい日程を優先させているため、夏は、教員採用試験や給食管理校外実習事前準備期間に重なり、3、4年生が参加できない。冬は、1、2、3年生は授業があるため参加しにくい。年間を通して継続的に参加できないことが課題である。

学生の感想からもティーチン倉敷中央が学生の成長や気づきの機会となっていることがわかる。昨年度からタブレットを活用しながら運営しているため、参加した高校生全員が取り組んでいる。しかし、グループでコミュニケーションを取りながらまとめる部分では、「どうしたら話の輪に入っていけるよう誘導できるのか」等がファシリテーターに求められている(図5・図6・図7)。



図5 人生スケジュールを立てる



図6 子ども食堂に関わった経験を伝える

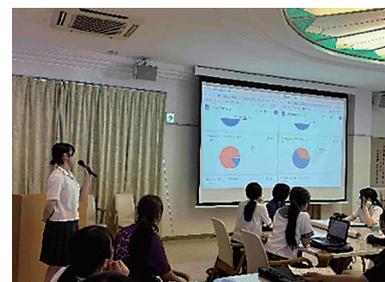


図7 意識の変化を読み取る

③ 見学・授業参観

「教職実践演習」等の授業の一環として、積極的にICT授業に取り入れている学校現場を見学させていただいた。その年次の学生に必要なと思われる学校種に見学や授業参観、模擬授業を依頼している(表8)。

表9 学校現場の見学 *令和6年は予定

	学校名等 (在学年次)	勤務予定学校種
令和4年	玉島商業高校 (4年)、倉敷まきび支援学校 (4年)、岡山南高校 (2年)	高校、中学校
令和5年	玉島北中学校 (4年)、作陽学園高校 (3・4年)	中学校
令和6年*	作陽学園高校 (3・4年)、岡山県高等学校家庭クラブ研究発表大会 (4年)	高校

④ 現職教師 (活躍する卒業生) との交流

教員採用試験対策講座では、活躍する卒業生から「家庭科教師として働くということ－教師としての喜びと専門性－」と題して講義やワークショップを受ける機会を設定している (表9)。教諭から学校現場の様子や授業実践や大学時代に学んでおくべきこと、今役に立っていること等を直接聴くことで、教師への志を高くする機会となっている。

表10 現職教師の講話 *令和6年は予定

	高等学校	中学校
令和4年	島根県立隠岐島前高等学校教諭 (リモート)	岡山市立山南学園義務教育学校教諭
令和5年	岡山県総合教育センター指導主事	倉敷市立鴨方中学校教諭
令和6年*	岡山県立高等学校教諭	備前市立中学校教諭

5. まとめと考察

教師は時代の変化に対応する実践力が求められている。スキルを積み上げていくことによって教師は実践力を身につけていくとされるが、実際には、理論と実践の往還なくしては教育現場での実践力は育成できない。令和4年12月、「『令和の日本型学校教育』を担う教師の養成・採用・研修等の在り方について～『新たな教師の学びの姿』の実現と、多様な専門性を有する質の高い教員集団の形成～ (答申)」が示され、「教師に求められる資質能力」は、「教職に必要な素養」「学習指導」「生徒指導」「特別な配慮や支援を必要とする子供への対応」「ICTや情報・教育データの利活用」の5つにまとめられた。また、文部科学省の教師を目指す学生向け資料では、「今回の答申は、教師の養成・採用・研修の一体的な改革を通じ、教師が創造的で魅力ある仕事であることが再認識され、志望者が増加し、教師自身も士気を高め、誇りを持って働くことができるという将来を実現するための提言である。」としている。この「教師の養成段階」は、大学のみで行われるものではなく、①家庭科の魅力ある授業を通して教師を目指す生徒が増加し、教員養成課程設置大学へ入学すること、②大学での養成は学校現場等の協力も得て理論と実践を往還しながら教壇に立つイメージを膨らませていくこと、③目の前の生徒理解と授業力向上を目指して絶えず研鑽を積むことと考える。以上のことから、授業や活動を行う上で、大切にしていることは次の7点である。①授業は生徒と対話しながら、②タブレットは文房具、③黒板×ICTのハイブリット授業 (自分のスライドだけに頼らない)、④教材研究を楽しむ、⑤先輩、後輩の良いところをまねる、⑥失敗から学ぶことは多い、⑦謙虚・研鑽・感謝の心である。

6. 今後の課題

学校における働き方改革の目的は、教師のこれまでの働き方を見直し、自らの授業を磨くことで生徒に向き合う時間を確保し効果的な教育活動を行うことである。大学での教職志望を維持向上させる観点からも、ICT活用能力の向上や教職履修者が学年を超えて支え合うシステム、高校や地域と連携した学校体験活動の充実や学校現場の支援体制、活躍する卒業生との交流機会等を通して在学中だけでなく卒業後も「くらしき作陽大学卒業生」として、協働し教師実践力を高め合っていくことを期待している。

堀内³⁾は、模擬授業の意義として、「①授業の疑似体験をする、②授業の事前準備から終了までの見通しを持つ、③授業を解釈する視点を獲得する、の3点と授業後の相互評価の効果」を挙げている。

現在、学生は「家庭科教育法1～Ⅳ」および模擬授業研究会で5回の模擬授業を実施後、作陽学園高校での模擬授業を行っている。その後、教育実習前に2回、教育実習後に後輩たちに研究授業、「教育活動実践演習」では作陽学園高校で調理実習(TT)の合計10回、実践力向上のための模擬授業を行っている。このことは、学生相互の評価でも有意な評価が得られているが、そのためのシステムを構築していくことが今後の課題である。

引用文献

- 1) 中央教育審議会(2022).『令和の日本型学校教育』を担う教師の養成・採用・研修等の在り方について～「新たな教師の学びの姿」の実現と、多様な専門性を有する質の高い教職員集団の形成～答申. P5
- 2) 岡山県教育委員会高校教育課「生徒一人一台端末の導入について」中学生保護者の皆様へ(2020)
- 3) 堀内かおる.(2008)家庭科教員養成における模擬授業の有効性－コメント・レポートによる相互評価に着目して－. 日本家庭科教育学会誌, 51(3), P177

参考文献

村上睦美, 加賀恵子, 手塚貴子, 小倉育代, 黒光貴峰, 鈴木明子, 鎌田浩子, 小清水貴子, 妹尾理子, 室雅子, 青木香保里, 木村紀子, 志村結美, 日景弥生.(2024). 国立大学家庭科教員養成課程に在籍する大学生の「家庭科教員に求められる資質・能力」の実態調査. 日本家庭科教育学会誌, 67(2), 41-52

